

真夏のネプチューン

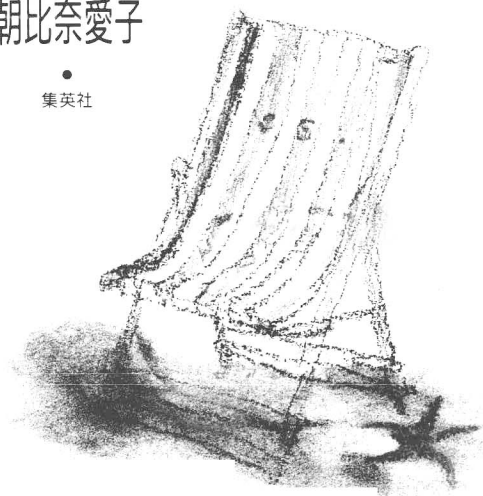
朝比奈愛子



真夏のネプチューン

朝比奈愛子

●
集英社



真夏のネプチューン

一九九二年七月一日 第一刷発行

著者 朝比奈愛子

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六二〇〇
電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

製作課 (〇三) 三三三〇一六〇八〇
印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

真夏のネプチューン

トロカデロ広場には、半円形の広場から放射状に伸びている道が五本ある。それぞれ道角にあるカフェテラスは、人々が日差しを浴びやすいように、テントの届かない歩道にまでテーブルを出していた。エッフェル塔が真正面に見えている。人や車が、回り灯籠がめぐるような気ぜわしげなリズムで動いていた。

シャイヨー宮殿の前に、数分おきに観光バスが止まる。遠くからでは、魚の口のようにしか見えない大きなバスの乗降口から、人の群れが列になって吐き出された。人の列はそこから模様を描くように左右に広がり、シャイヨー宮殿の丘にちりぢりに立つのだが、その群れは、いつときすると決まって小さくかたまって、波が押し寄せるように歩道を渡ってこちら側のカフェに入ってきた。観光客たちの動きは一定の規則正しさを伴って繰り返され、満ち干きする潮のように広場を埋めるのだった。

カフェではボーイがテーブルの合間を、小走りで客に飲み物を配ってゆく。客が飲み物をテーブルの上に置くと、ボーイたちは金を受け取ったしるしに、通りすがりに片手をつと伸ばして伝票の端を指先でちぎって行った。客は大急ぎで渴いた喉を潤した。店を出た客たちが、再び列になってバスに吸い込まれるように消えて行くと、カフェのテーブルの上には、空になったグラスがとり散らかされたまま残る。ここでは、どのカフェでも、土産用の絵葉書が飛ぶように売っていた。

一人の黒人が、広場の西側のメトロの入口から姿を現し、デロウ通りの角のカフェで立ち止まった。その男があまり身なりがよいので、若い売り子は驚いて男から目を離すことが出来なかった。ふだん彼女が見つけている黒人といえば道路工事の工夫ばかりなのだった。彼らは、たいてい着古した作業服を身に付けている。シャイヨー宮殿の広場にも黒人がたくさんいたが、みな、寸足らずのズボンと皺だらけのシャツ、そして裸足に見えるような汚れたサンダルを履いている。黒人たちはエッフェル塔の見晴らせるシャイヨー宮の中庭にたむろして、おもちゃの鳥を売っていた。観光客を見付けると、大きな手をひねるようになってぜんまいのねじを巻きながら近寄って行くのだが、誰も出店を出しているわけではなく、羽をたたんだおもちゃの鳥を詰め込んだ布袋を腰に巻いている。もの売りのやり方は、みな同じだった。ねじを巻き終わった途端に、鳥をばつと

手放すのだ。ビニール製の鳥は低空を五メートルほど飛び、それが一瞬人目を引く。鳥が羽ばたくと、不恰好にふくらんだ腹のあたりでねじの巻き戻る音がキィキィと鳴り、鳥の鳴き声のつもりなのだろう。しかし、低空に響くのは壊れかけたねじの唸る音で、鳥の声とは似ても似つかないものだった。観光客は気抜けがしておもちゃの鳥と黒人から目を逸らす。それでも彼らは無表情に何度でもねじを巻き、あきもせず一日中鳥を飛ばしていた。彼らはフランス語を喋らず、カフェに寄ってきたこともない。

ところが、売り子の目の前に立っている男はバリっ子と変わらぬフランス語を喋ったのだった。

「空いている席は、まるでないね」

落ち着きのある、低い声だった。そしてワイシャツは真っ白な仕立て上がりだ。首筋が膨れるほどにきつく締めたネクタイのこぶは、皺ひとつなく結ばれている。売り子が、眩しいほど赤いネクタイに見入っていた視線を上げると、男の分厚い唇から白い歯がのぞいていた。

アフリカ系の黒人だろう。アフリカ系の黒人は肌が黒色だから、色合いですぐにそれと分かるのだった。彼らは澱んだ目をしたアラブ系の黒人とは違って、目が青かった。

「だから、済まないが両替だけだ」

黒人は、新聞とエキスパレスを小脇に挟んでいた。ここいら辺ではエキスパレスはあまり見かけない。その雑誌は、いわゆる高尚な人たち以外にはほとんどうけなかった。

誌面は政治評論や文化記事などであらましている。売り子はゴシップ雑誌のほうが好きだったから、表紙だけしか見たことがない。エキスパレスを読む人は、そこそこ教養のある人に違いなかった。そんな驚きを相手に知らせずにはいられずに、売り子は愛想よく「どうぞ」と言った。ふだんは両替など、めったにしない。男はポケットの中から百フラン札を出すと、微笑みをもらして札を言った。手の甲は墨色で、爪には桃色の艶がある。その手の中の札が皺くちやではなかったので売り子はまた驚いた。たいていの黒人は、札を皺くちやにして握って出すからだ。

彼女は、その身なりのいい垢抜けた男にじっと見つめられた気がしたせいで、相手の望むままに一フラン硬貨を太急ぎで取り混ぜた。

黒人は新聞とエキスパレスを小脇に挟むと、売り子の興味深げな眼差しを尻目にゆっくりとカフェを離れ、デロウ通りの横断歩道を渡って行った。

サニア・マッサンゴは、両替をしたついでにカフェで電話を使いたかったのだ。しかし、トロカデロ広場のカフェはどこも人声がうるさかった。ましてこのいい日和では、バスの騒音はフォッシュ將軍の銅像を埃まみれにした上に、店の片隅の電話場まで響い

てくるに違いない。彼は静かな所を探しているのだった。どこかに、落ち着く所があるだろうか。

デロウ通りの一本先のジョルジュ・マンデル通りは街路樹が立ち並んでいて、日中でも人けがない。そこへ行けば落ち着いた電話ボックスがあるはずだった。彼は小脇に挟んだ新聞とエキस्पレスを締めつけるように腕に力を込め、タクシー乗り場を横切ると、ジョルジュ・マンデル通りに向かって歩いて行った。気に入った場所を見つけるのにはいつも時間がかかるのだ。道の中程で目に留まった電話ボックスにはわきにベンチがあって、そこには人が座っていた。彼はそこを通り過ぎながら、自分の氣に障らない場所がどこにあるだろうかと思案した。

トロカデロ広場では、観光客の群れが相変わらずシャイヨー宮殿前に止まるバスから吐き出されていた。サニア・マッサンゴの耳元から広場の騒音が少しずつ遠ざかって行った。彼が、ジョルジュ・マンデル通りの入口に差し掛かり、眩しい太陽を遮るマロニエの巨木を見上げた時、デロウ通りのカフェには、また新しい観光客の一群が押し寄せ、彼の姿は、やがてカフェの売り子の視界から見えなくなった。

ジョルジュ・マンデル通りに入って大分歩いたのに、サニア・マッサンゴは氣に入った電話ボックスを見つけることができなかった。ひとつ目の電話ボックスはバスの停

留所の真横にあり、バスを待つ人が立っていた。ふたつ目のボックスの横のベンチには、また、人が座っていた。もともと彼は電話をかけるのにあまり気が進まなかったせいかも知れない。しかし彼には、電話をかけなければならない義務があったのだった。気がつくど道筋はアンリ・マルタン通りに差し掛かっていたので、本気になって電話のできる場所を探さなければならぬと思った。そう心に決めたとともに、スポンチニ通りを渡ったところに電話ボックスがあった。

「あっさりやることだ」

新聞とエキスプレスを小脇から手に取って、扉を押し開けながら自分にそう言い聞かせる。ムッシュ・デュボーのことなど彼はてんから相手にしていなかった。ムッシュ・デュボーは他人に説教することが好きで、あの男ほど自分の趣味に合った職業に就いた人間を見たことがない。しかしマッサンゴは、ムッシュ・デュボーのお蔭で窮屈な日々を過ごすのを余儀なくされているのは確かだ。デュボーは彼に、三日に一回電話で連絡を取ることを義務づけていた。デュボーは受話器の向こうで、今、どの街から電話をかけているかを尋ねたあと、決まりきったようによい職場を見つけたかどうかを聞く。

「勤勉に働かなければ駄目だぞ。早く仕事を見つけ給え」

喋る時には、口をとがらせて唇の端に唾を溜めるデュボーだが、公衆電話は一フランではすぐに切れてしまうから、唾が飛ぶほど喋るわけにはいかないのだ。マッサンゴーは、ムッシュー・デュボーの決まり文句を思い浮かべながら、すっかり暗記してしまっている番号を指先を引つ掛けるようにしてしぶしぶ回した。電話機の奥のほうでベルが鳴っている。彼は受話器を耳に当てたまま、ボックスの上に置いたエキस्पレスのページを手持ち無沙汰にばらばらとめくった。その間に呼び出しベルが、アンリ・マルタン通りから遠く離れた街のはずれに走って行き、歴史的建造物の大きな暗い建物の中にムッシュー・デュボーの姿を探して駆け巡っていた。太陽が、樹木の間から眩しい光を投げかけ、額に汗をにじませる。ガラス張りの電話ボックスの前を車がひっきりなしに通る過ぎたが、マッサンゴーの耳には響かなかった。

「もしもし、サニア・マッサンゴーです」

ムッシュー・デュボーを追いかける回線が受付に通じると、電話はすぐに取次がれる。「ああ、お前か。それで今、どこに居るんだ？」

「アンリ・マルタン通りでさあ」

「これは公衆電話からかけとるんだな。随分、静かなところにいるじゃないか」

「風がまったく通らない電話ボックスで、汗をかいてるってわけですよ」

「暑いのはこっちも同じことだ。クーラーをかけるにはまだ早いからな。それで、今日はそこで何をしている?」

「新聞を読んです」

マッサンゴーはさっき買ったばかりの新聞をまだ一行も読んでなかったが、とっさにそう答えた。ちらりと新聞に目をやると、転覆した列車の写真が目についた。転覆した列車は、魚がはらわたを出したように横倒しになっていた。

「それで、何か得るものはあったか?」

「分かったことは、新聞を全部読むと四時間はかかるってことでしょうかね」

マッサンゴーは、新聞をひっくり返して見る。裏面は広告の羅列だった。

彼は毎朝、新聞を広告欄も見逃さず隅から隅まで読む。新聞の広告は、馬鹿らしい宣伝文句のものを含めて、売り手の貪欲さが紙面の裏側で息を潜めているようなのがおもしろかった。

「新聞ってやつを読むと、人類の置かれている立場がいかによく分かりますあ」

マッサンゴーはいつも目先のことしか考えないデュボーをからかうように言った。

「ふん」

デュボーが、唇の端に唾を溜めはじめたらしい。

「お前が博学だってことは、わしも知っとるつもりだよ。人類の置かれた立場だと？ そんな洒落た言葉は誰にでも言えたものじゃないからな。しかしお前は今、自分の置かれた立場を考えることのほうが先決じゃないのか？ お前は求人欄を見ているのか。目を皿のようにして仕事を探すんだ。一日も早く結果を報告し給え。分かったな」

それから、ムッシュ・デュボアのいつもながらの偉ぶった講釈がひとくさり続いた。マッサンゴーは、木立ちの合間を鳥が飛んでいるのを眺めながら、適当に答えていた。「お前に欠けているのは、勤勉ということだ。怠け者は、いずれは神の裁きを受けねばならん。お前が信仰にも不熱心なのが、いちばんの問題かも知れん」

だが、彼は神など信じていなかった。どっちみちすべてのものに何かが欠けている。「どうしたって俺は自由だ。好きなことをやるさ」

マッサンゴーがそう考えながら、ムッシュ・デュボアの言葉を聞き流していると、講釈はやつとお決まりの「勤勉に働かなければ駄目だ」というくだりにきた。

「分かってますよ。できるだけ努力します」

「よろしい。いつもそんなふうに素直でいることだ。また連絡し給え」

受話器を耳に当てたまま交信フックを切ると、二人の会話を電流で繋いでいたコインが、機械の奥のほうにこりと落ちる音がした。その音を合図に、七十二時間だけデュ

ポーとの縁が切れるのだ。マロニエの鮮やかな緑が、再び彼の目に蘇った。生い茂る木の葉の一枚一枚の輪郭がはっきり見える。小鳥がまた一羽、枝から枝に飛んだ。

丁度サニア・マッサンゴーが、電話機の上に置いた新聞とエキスプレスを手に取り、ボックスから出ようとした時、一台の車が目の前に滑り込むようにして止まった。埃だらけのボンネットが、ガラス越しに目にはいった。あまり真正面だったので、彼は立ちすくんだまま、車が完全に止まるのを咄嗟に見つめた。待っていた電車がプラットフォームに滑り込んだときのようなタイミングだ。目の前に止まった車の運転席に、女の横顔が見えた。サニア・マッサンゴーは無意識に、電話ボックスの中で身を隠すようにした。運転席から降り立った女が、彼に気がつかずに車の向こう側から電話ボックスの正面に顔を向ける。そして無造作に髪をかきあげた。東洋人特有の、丸みのある顔。柔らかな輪郭が手の届くほど近くに見える。西洋人に比べるとずっと背が低い。女はうつむいて車のドアをロックすると、あたりを見回しめせず車を離れた。急いでいる感じがする。この附近に馴れている様子がした。車から離れた女はアンリ・マルタン通りを少し戻って歩くと、スポンチニ通りの角を曲がって行った。額に汗がにじむのもおかまいなく、電話ボックスの中に立ちすくんでいたマッサンゴーは、やっと我に返ってガラスの扉に手をかけた。彼は女を見ている間じゅう、息のつまるような緊張感にとらわれて

いたのである。

「いい女だ」

まるで自分がずっと昔から、その女と出会うことが決まっていたような引力だった。彼はその時瞬時に、アンリ・マルタン通りを自分の庭のように歩いた女に対して、この時から始まる彼女と自分との関わり合いを、肌で直感したのだった。

マッサンゴーは電話ボックスから表に出ると、ふっと息をしてポケットから煙草を出して火をつける。歩道に女の甘い匂いが残っていた。街路樹のアーチに風が吹いて、木立ちがさらさらと音を立てた。ゆっくりと後を追ってスポンチニ通りの角に立つと、小柄な体を弾ませるようにして歩く女の後ろ姿が見えた。彼は四つ角に佇んで煙草を吸いながら、女が入って行った家を見届けた。

やがて女が再び表通りに姿を現した時、サニア・マッサンゴーは、通りの中筋のパーキングゾーンの車の列の合間に立っていた。そこは歩道を歩く人をやり過ぐすには一番いい場所だ。遠くでもなくそう近くでもなく、目当ての女を見ることが出来る。彼は車の一台に寄りかかり、新聞と雑誌を小脇に挟んだまま腕組みをして立っていた。女が片手に大きなノートを抱え車に戻ってくる。彼女の歩き方には、自分で物事を考え、自分で物事を処理する人間独特の勢いがあった。胸元にネックレスが揺れ動き、熟した女の

わだかまりのなさが漂っていた。

マッサンゴの脳裏に、ムッシュ・デュボアの決まり文句が浮かぶ。

「勤勉に働かなければ駄目だ。早く仕事を見つけ給え」

マッサンゴの目は、デュボアとの約束をあっさりと返上する喜びに輝いていた。いつものまにか太陽がエッフェル塔の真上に昇り、アスファルトの地面に、木立ちが涼しげな影を落としている。女の手が走り去った後のアンリ・マルタン通りに、五月の昼下がりの風が吹き抜けていった。

パリ十五区のダンジグ通りは裏町である。あたりには名だたる旧跡もなく、街は閑散としていた。路地に、間口の狭い小さな商店がうらぶれたように軒を連ねている。建物は三階建てか四階建ての古いものばかりで、メトロの地下道を表示する十メートルほどの鉄柱だけが、空高く佇んでいた。すり減った石畳の歩道は、あちこちがひび割れ、通りは道幅が狭いために並木も植えられていない。太陽は木々に遮られることもなく、石畳は一日じゅう熱を持っていた。近所の人たちが買い物のために、時たま道を行く。ダンジグ通りは、涼しい風が通り抜けたことのない街だった。

サニア・マッサンゴは、その通りを、十メートルも歩いたことがない。彼はいつで